

株式会社モレーンコーポレーション

製品情報・会社情報：<https://www.moraine.co.jp>

本社

〒164-0003 東京都中野区東中野 5-1-1 ユニゾンモール 3F
TEL:03-5338-3911 FAX:03-5338-3912

北海道支社

〒060-0806 北海道札幌市北区北 6 条西 6-2-24
第 2 山崎ビル 5F
TEL:011-700-2141 FAX:011-700-2142

東海支社

〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内 3-8-10
ISH 丸の内ビル 7F
TEL:052-955-5017 FAX:052-955-5018

関西支社

〒564-0063 大阪府吹田市江坂町 1-10-17
オフィスプラザ江坂
TEL:06-6310-7580 FAX:06-6310-7579

九州支社

〒812-0882 福岡県福岡市博多区麦野 5-10-24
サンセールクミビル 1F
TEL:092-405-6300 FAX:092-405-6330

モレーンラボ & 倉庫

〒210-0869 神奈川県川崎市川崎区東扇島 26-2



医療従事者の皆さま 本当にありがとうございます。

コロナ禍の最前線で戦ってこられた皆さま
大変な日々の中、お疲れ様です。
そして本当にありがとうございます。
今回のコロナでは感染対策をとりまく環境が激変し
私たちモレーンも感染症というものについて
改めて深く考えさせられました。



私たちが創業以来掲げてきた理念「感染管理の大衆化」。
ではその先にモレーンはどんな未来をつくりたいのか？
そしてその未来をつくるためのモレーンの使命とは？
コロナ禍で改めて考え、原点として立ち返ったのは

**「人と人がふれあえず、
警戒し合う社会なんて悲しい。
人と人が信じ合い、つながり合う。
そんな世界をつくりたい。」**

という強い思い。これをもとに理念を再構築することになりました。

Vision

**感染症が
人と人を遠ざけることのない
未来を実現する**

Mission

感染対策を進化させる

Vision Statement

日本の病院から院内感染をなくしたい。
そんな信念を胸に、モレーンは
感染管理の大衆化に取り組んできました。
そして2020年、新型コロナウイルスによって世界は一変。
たくさんの命が奪われ、会いたい人に会うことが
できない日々が続きました。
これから幾度となく訪れるであろうパンデミックの中で
どうしたら人のつながりを守れるだろうか？
私たちはその答えを追求し続け、感染対策を進化させていきます。
感染症が人と人を遠ざけることのない未来のために。



人々のつながりが、断たれることのないように。



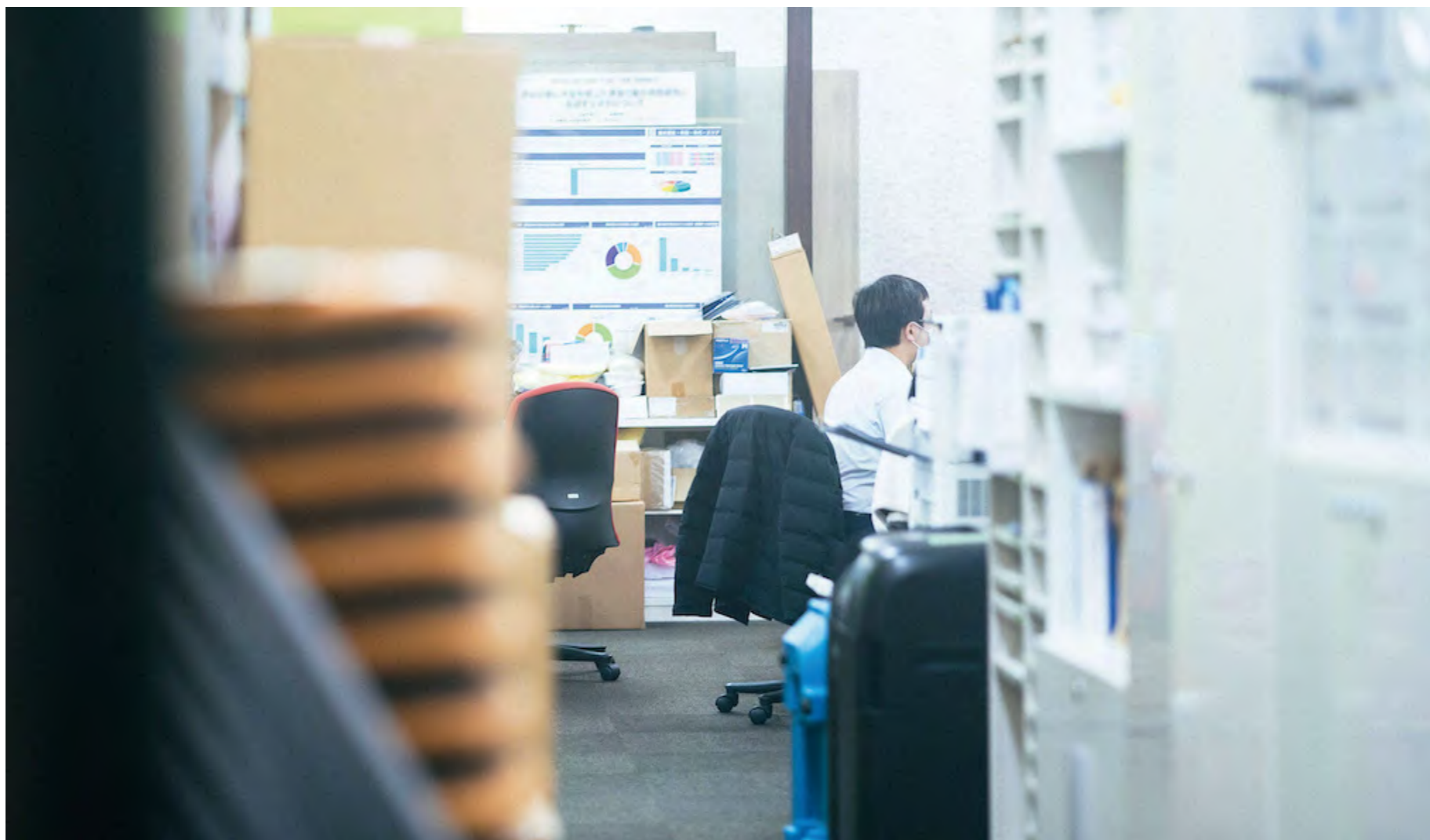
感染対策は距離を置くためではなく
もっとふれあうためにある、と私たちは考えています。



最前線で戦う皆さまの、少しでも近くに寄り添い



日々の仕事が
誰かの命とつながっていることを忘れず



現場の課題を共に解決するために
今日も皆さまのもとへ向かいます。

Value

企業理念 (Vision・Mission) の改訂に伴い行動指針 (Value) もアップデートしました。

企業理念を達成するために私たちはどんな行動を取るべきなのか？

モレーン社員として改めて大切にしたいことを言葉にしました。

これが、私たちの新しい Value です。

1. 常に相手を思いやり、行動する
2. ワクワクする、ワクワクさせる
3. 迎合せず、相手の目的の本質を考える
4. 活発に対話するチームになる
5. 挑戦を称え合う
6. 自分を知り、学び続ける
7. 日々の仕事が命とつながっていることを忘れない

モレーン社員たちはこのようなことにやりがいを感じながら、日々働いています。

Q1. なぜモレーンで働きたいと思った？

ただ単に製品を売るのではなく、こだわりの製品を紹介したいから。そして「感染管理コンサル」としてお客様の課題に取り組みたいから。

東海支社 営業部 小出



自分が医療従事者として感じていた感染管理の課題をこの会社を通じて解決したいと思ったから。

デンタル事業部 佐藤



Q2. どんな時に喜びを感じる？

提案を通じて課題の解決につながる“驚き”や“ワクワク”を感じてもらえた時。「ここもっと推した方がええで！」とアドバイスをいただくことも…

関西支社 営業部 大山



こと感染管理に関しては、世界で誰よりも先に行動していることを感じられた時。

グローバル・マーケティング部 関谷



ユーザーの方が困った時や相談したいことがあった時に、私自身に直接連絡をいただいた時。中でも一番嬉しいのは、相手の問題がクリアになった時のありがとうの一言！

人事部 杉山



MORAINÉ DESIGN

製品の性能がいいのは当たり前。
見た目もおしゃれで身につけたいくなる
デザインは、働く人たちの心を
いきいきと躍らせ、現場を明るくします。
そして、患者さんたちがデザインのおかげで
ポジティブな気持ちになってくれることは
とても大切なことだと考えます。
医療の現場に、デザインをもっと。
私たちモレーンのこだわりです。



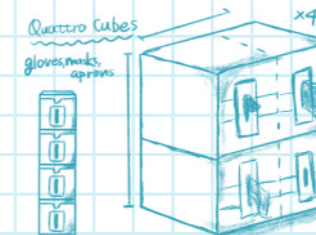
カプセルスーツ

SF映画の宇宙服のデザインを
参考にゼロから開発した製品
です。なによりこだわったの
は中にいる人の笑顔が見える
こと。創業時から持つ「人と
人を遠ざけない」という想いが
実際に形になりました。



ゼロディスペンサー

現場でグローブ・マスク・エ
プロンをもっと取り出しやす
くできないか?と考へ開発し
たオリジナル製品。スペース
に合わせて箱を縦にも横にも
重ねられる設計にしています。



アイウェア

もともとスポーツ用品をつくっていたイタリ
アの会社によるファッション性が高い製品。
スタイリッシュさと機能性を両方兼ね備えて
おり「デザインも、性能」というコピーで日
本に紹介しました。最近ではドラマでも使わ
れることが多くなっています。現場でも看護
師さんたちにおしゃれに、心弾ませながら働
いていただけたらうれしいです。

モレーンのこれまで、 モレーンのこれから。

病院の先生方も看護師さんも患者さんの命を守るために働いていて、患者さんは病気を治したくて入院する。それなのに、目に見えない菌やウイルスのせいで院内感染して命を落とす…。こんな理不尽なことってあるだろうか？

草場恒樹 CEO



— 今日企業理念を見つめ直すことになった流れについてじっくり伺いたいと思います。まずは、事業を始めた頃、草場さんがどんな想いを持っていたのか、当時のお話から伺えますか？

草場：はい。30年ほど前、私はまだ医療の「い」の字も知らない状態でした。水溶性ランドリーバッグ「アクアフィルム」の英国担当者のジュリアンから「この製品は英国では院内感染対策で役に立っている」と聞き、東京の病院に飛び込み営業に回ることになりました。ところが、当時はまだ日本には「院内感染」という概念が普及していない時代で、大苦戦。ジュリアンから「まずは英国の現場を見に来たらどうだ？」と言われ英国に1ヶ月程滞在することになりました。そこで初めて「ICN (Infection Control Nurse)」という存在を知ったんです。ご迷惑かとは思ったのですが必死に頼み込んで、ICNの方に1日中ついて回りました。それで初めて現場を見まして「院内感染って本当に大変なことなんだな、本当にこれは大事な仕事だな」と腹落ちしました。そして帰国後は説得力をもって病院に訪問にいけるようになりました。

— リアルな現場を見て腹落ちしたことが、草場さんのターニングポイントとなったんですね。その後、どうなったのですか？

その後5-6年は中々アクアフィルムも売れず、英語の文献を無料で翻訳することでお客さまと関係性をつなぎとめる日々が続いたのですが、結果的にそれが自分の勉強にもなりました。そんな経験が今のモレーンの文化を作っているのかもしれない。物売りではなくてお客さまの目線で、お客さまの課題と一緒に解決しようとする「感染管理のコンサル」という私たちの目指すスタイルです。今でも現場を知ること、そして学び続けることは大事にしています。そして1992年にアクアフィルムの展示を通して慶應義塾大学病院の副看護部長をされていた廣瀬千也子先生との出会いをはじめとして、たくさんの方達の支えがあって今に至ります。※このあと廣瀬千也子先生の対談も掲載しております。ぜひご覧ください。

— では、これまで掲げてきた企業理念「感染管理の大衆化」はいつ作られたのですか？

2003年に作りました。会社としてはまだ10名未満の規模でしたが、今後に向けて企業理念という核を持つべきだろうと思ひまして。自分たちの中にある想いを言語化するのに大変苦しんだのを覚えています。

— 「想い」ということですが、この「感染管理の大衆化」という理念の開発時には草場さんの中にどんな想いがあったのですか？

院内感染に対する憤りだと思います。病院の先生方も看護師さんも患者さんの命を守るために働いていて、患者さんは病気を治したくて入院する。それなのに、目に見えない菌やウイルスのせいで院内感染して命を落とす…。こんな理不尽なことってあるだろうか？こういう強い想いはあったんです。そしてどの病院でも感染管理が当たり前の世界を実現したいという意味を込めて「感染管理の大衆化」という理念を作りました。

— 社内インタビューでは、社員の皆さんが既存の企業理念に対して強く共鳴していることが伺えました。それでもこの理念を改訂することのためにためらいはありませんでしたか？

もちろん、これまで長く掲げてきた企業理念を改訂することは大きな勇気が必要でした。新型コロナウイルスがなかったら理念を改訂してはいないと思います。それほど、新型コロナウイルスは世界を変えてしまった。院内においても、一般社会においても、人々の感染対策の意識は激変し「感染管理の大衆化」はこれまでとは比較にならない勢いで進みました。この大きな変化に対して、モレーンも変わらなければ…と強く感じました。私たちは感染管理の大衆化の先にどんな未来を描きたいのか？それを改めて言語化し、全社で共有する必要がありました。

— Vision「感染症が人と人を遠ざけることのない未来を実現する」、Mission「感染対策を進化させる」に決まった経緯を教えてください。

理念改訂は、私を含む社内の6名のコアメンバーと議論し、全社員の意見も聞きながら進めました。Visionを明確にするために改めて起業時の想いやモレーンが大切にしたいことについて深掘りしていくうちに「人と人を遠ざけるものであってはならない」というフレーズに辿り着きました。これはもともとは過去に个人防护具用に開発していた感染対策のコピーなのですが、ここにモレーンの想いが凝縮されていると考え、Visionの核に据えました。今回のコロナはまさに物理的にも精神的にも人々が分断されてしまった。そんな世界に人と人のつながりを取り戻したい。それが私たちの創りたい未来なのです。そしてMissionは、その未来を実現するための、モレーンの使命です。時代の変化に合わせて、感染対策の新しいあり方を提案し、進化させる。VisionもMissionも簡単に成し遂げられるようなことではありません。私たちの新たな挑戦が始まります。

日本のCNICの原点

日本人で初めて英国でICNの資格を取得後、
感染管理認定看護師(CNIC)教育課程創設期や
ICNJ発足に関わり日本の感染管理分野での第一線で
尽力されてきた廣瀬先生をお招きして今CNICや
モレーンに期待することなど、お話を伺いました。



草場恒樹

株式会社モレーンコーポレーションCEO。7年間の商社勤務を経て1993年モレーンコーポレーション設立。

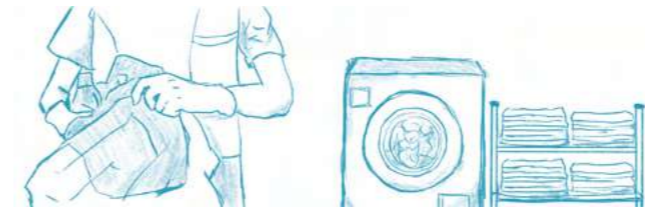
廣瀬千也子先生

元社団法人日本看護協会常任理事。慶應義塾大学病院副看護部長を経て、日本看護協会看護研修学校専任教員(感染管理学科)、日本看護協会看護研修学校校長を歴任。

すべての始まり

草場：モレーンの歩みを語る上で廣瀬先生との出会いは「原点」というべき出来事です。すべての始まりは、1992年の国際モダンホスピタルショーで水溶性ランドリーバッグ、アクアフィルムにご興味をもっていただけたことでした。当時、私と英国の担当者ジュリアンの2人でブースを出していたのですがあまり見てくれる方もおらず。そんな中、慶應義塾大学病院の副看護部長であられた廣瀬先生に関心を持っていただき、びっくりしたのを覚えています。でも当時まだ院内感染に真剣に取り組む病院も少なかったのに、どうしてアクアフィルムに興味を持っていただけたのでしょうか？

廣瀬先生：1980年代後半、私が勤務していた病棟で術後患者さんがMRSA感染にかかり、あっという間に病棟中に拡がってしまったんです。「まさか自分の働いている病棟で」という感じでした。院内感染は患者さんにとって予期しない苦しみを与え、人々の尊い命を脅かします。また、重症患者さんが増えていくと看護師の夜間や休日の勤務も増え、しだいに私たち医療従事者に対して不審な目も向けられる…。本当に大変な経験をしたんです。そんな折、展示会でアクアフィルムを知りました。当時私は院内で感染管理に関する大規模な院内調査を行ったところ、緊急性の高い課題の一つに「感染性・汚染リネンの処理」が上がっていたんです。ちょうどランドリーで溶けるバッグ、アクアフィルムを知ってこんな素晴らしいものがあるんだ！と。また、モレーンのブースでお会いしたジュリアンがイギリスのICN協会法人メンバーだということがわかり、英国のICNを紹介していただきました。当時私は、笹川医学医療財団の海外研修の機会を得ていました。私にとって本当にハッピーな出会いだったんです。



アクアフィルムの導入

草場：モレーンにとっても大きな意味を持つ出会いでした。慶應義塾大学病院でのご採用が日本で第一号だったんです。でも新しい製品の導入ってものすごく大変なことですよね。どのようにその困難を乗り越えて導入を実現されたのでしょうか？

廣瀬先生：導入に向けて5つのことを行いました。まず、アクアフィルムが本当に法令基準温度で溶解するのか、水道管が詰まらないかを実験し、担当者の不安を払拭しました。そして感染性・汚染リネンの定義、テスト病棟での評価、使用基準・手順の作成。やはり一番大変だったのは5つ目の年間経費の算出です。現行の処理の場合とアクアフィルムを導入した場合を徹底的に比較しました。

草場：どのように比較されたのですか？

廣瀬先生：当時はまずリネンに血液がついていたら手洗いして、消毒液に浸けて、別々のビニールに入れて…というような膨大な作業をしてたんです。毎日の大量のポリエチレン袋、消毒剤の費用、看護助手の件費など算出すると年間2000万円位になっていました。ところがアクアフィルムを使ったら年間300万円位とびっくりするぐらいの経費削減になる。その報告書を提出し、承認されました。同時に、私立医科大学病院30ヶ所にこの問題についてアンケートをしました。グルタラールアルデヒドやガス等で処理していたことがわかり、現場の業務の煩雑さ、同時に消毒剤ばく露のリスクを実感していました。アクアフィルムのことは学会や雑誌で紹介しまして、他の施設にもどんどん広がっていききましたね。

草場：導入にあたって様々な調整をされたんですね。これこそCNICの役割、ということはこの時代にやられていたんだなあ…と改めて本当に素晴らしいと感じます。(次ページへ続く)



英国の感染管理

草場：その後、先生は英国で感染管理専門看護師の教育課程である ENB (English National Board) 329 コースを修了され、日本人で初めての ICN になられました。そもそもなぜ英国でチャレンジしようと思われたのでしょうか？

廣瀬先生：当時、院内で感染対策に対する認識と行動のズレみたいなものは感じてはいたんですが、周りを説得するには自分が体系的な勉強をする必要があると感じていました。そこで、まず英国で5週間の研修に参加しました。これが自分が感染管理分野でどう歩いていくかを考えるきっかけになり、ENB329コースを受講することにしました。患者のケアといった臨床をとっても大事にする「臨床的な側面」と環境・設備などの「管理的な側面」をがちり融合させた感染管理の授業を受けることができました。また、その国の ICN の歴史を知ることの大切さ、そして ICN が病院の評価と経営の両面で貢献することの大切さなど、たくさんのことを学びました。具体的に勉強になったのは隔離可能な感染患者用個室の整備、厳格な MRSA 対策、手指消毒の徹底、行きすぎない消毒、一般市民への啓蒙活動等です。

草場：この学校の学生さんはどんな方達だったのですか？

廣瀬先生：すでに現場で働いている年齢もバラバラの英国人ナース10名で皆、議論好きでした。とても仲良くなりまして、私一人が遠い日本から来ているので挫折しそうになると「いやいや最後までやるんだ」と励ましてくれたんです。彼らとの出会いは貴重な財産ですね。皆から「看護の現場が好き」という誇りと情熱みたいなものを感じました。それが最終的に私が日本で色々なことを始めていく原動力になったと思います。

日本感染管理ネットワークの設立

草場：2000年、日本看護協会は感染管理認定看護師教育課程を創立、翌年の2001年には日本で初めて感染管理認定看護師が19名誕生しましたね。今回のパンデミックでもおそらくこの感染管理認定看護師の方々がおられなかったら、もっと大変な医療崩壊を起こしていたと思います。これまで大変なご苦労もされたと思うのですが、CNICをどのように発展させていったのでしょうか？

廣瀬先生：意気揚々と CNIC の誕生を学会で報告したのですが、当初は定員の少なさや教育期間が長いことについて風当たりも強かったですね。しかし、2003年の医療法改正で特定機能病院において多くの CNIC が専任になったのは大きな変化でした。これは現場で CNIC 達が成果をあげていたことが影響を与えていったと思います。徐々に CNIC の活動基盤が盤石になり、教育機関も増えていきました。2003年にこの CNIC をネットワークでつなぐ日本感染管理ネットワーク (ICNJ) を発足しました。CNIC が実践者として機能するための基盤となる有効な知識と技術の研修、そして仲間と交流することによって、自らの活動を客観視することができ、新たな活動につなげていけるネットワークが必要だと考えていたのです。そして、教育に関しては今回のコロナで、先輩 CNIC がいない施設で感染管理認定看護師教育課程を受講するナースが増えていると聞き、大変うれしいです。

CNICの皆さまへ

草場：今回のパンデミックで現場で大変な思いをされている CNIC の皆さまへ、メッセージをいただけますでしょうか？

廣瀬先生：CNIC の教育開始後、20年が経過しました。このコロナ禍を経験し、CNIC は時には他の医療機関地域、在宅ケアと活動は幅広く・深く浸透してきています。これからも「変化への対応力」と「伝達能力」という2つの力を高め、組織にとって不可欠なキーパーソンになれることを期待します。1つめの「変化への対応



力」というのは、大きい病院の中にと守られているところもあると思うんですけど、世の中が本当にどういう風に動いているのか？にもっともっとアンテナを張ること。そして2つめの「伝達能力」は、周りに伝える力です。もちろん最新の知識や技術も必要ですが、情熱をもって伝える力。そして、私はもう辞められただけドイツのメルケル首相が大好きなんです。彼女はずっと大変な人生だったと思うのですが、この前の退任スピーチで「常に心の中に楽しさを持って仕事をしていく」という言葉を残しています。やっぱりこういうことを大事に、これからも CNIC の皆さんには元気でやっていてもらいたいと思います。



モレーンへのメッセージ

草場：ありがとうございます。廣瀬先生からみてモレーンはどんな会社ですか？

廣瀬先生：学会ブースにも CNIC 達がたくさん集まるのは、なにかやっぱりほっとさせてくれるところがあるんじゃないかしら？人をはじき飛ばさない、人を受け入れる温かい雰囲気があるというか。皆さんよく勉強しているし、温かいハートがあるように感じます。結局、最終的にはそこが求められるんですよね。

草場：なんと…嬉しいお言葉です。

草場：最後に、我々モレーンに対して忌憚のないご意見というか…我々も ICN の方々と一緒に医療機関、そして社会をよりよくしていきたいと本当に思っているの、何かお言葉をいただけますでしょうか？

廣瀬先生：モレーン社はもうすぐ起業してから30年ということで、人生で言うと青年期から成熟期に入りますよね。やっぱりこれからはますます現場のニーズにフィットした良質な製品やサービスを、届けていただけたら嬉しいです。

草場：ありがとうございます。今日は「原点」というテーマで貴重なお話をたくさん伺えました。先生が30年程前に本当に何もなかったところから海外にチャレンジして、日本の CNIC の礎を築いてこられたお話というのは、今回本当に大変だった CNIC の方々に勇気を与えてくださるのではないかと思います。我々モレーンにとっても原点に立ち返って、気持ち新たにネクストステージへ向かうための機会となりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

MORaine HISTORY

1990

- 1997 病院機能評価・開始
(感染対策体制の確立を明記)
- 1999 感染症新法施行
(1897年「伝染病予防法」から102年ぶり)

- 1993 モレーンコーポレーション設立。水溶性ランドリーバッグ・アクアフィルム(英国)の輸入販売でスタート



左：草場CEO(29) 右：多瀬COO(33)

- 1993 以降英国の感染管理の現場へ



当初から現場主義にはこだわっており、新型コロナが発生するまでは毎年のように英国に視察に行っていました。

- 1994 熱水洗濯乾燥機(スウェーデン)販売開始

- 1996 HPC ロールエプロン(英国)販売開始
(日本初のプラスチックエプロン)

2000

- 2001 感染管理認定看護師教育課程(CNIC)制度開始
- 2003 一般社団法人日本感染管理ネットワーク(ICNJ)発足
- 2003 医療法改正(特定機能病院において専任の院内感染担当者の配置)

- 2003 企業理念「感染管理の 대중化」策定
- 2004 多数製品の販売開始
- 2004 シャープスコンテナ「バイオコンパクト」(スペイン)
- 2005 ベッドバンウォッシャー「ニンジョウ」(スウェーデン)
- 2006 アイウェア「ユニベット」(イタリア)
- 2006 PPE ディスペンサーシステム「モバイルポート」(国内開発)
- 2008 ポータブル隔離ユニット「ミンティ」(米国) など



このあたりから製品が増えていくのですが、モレーンがゼロからニーズを発想したということではなく全て現場のニーズを聞いてそれに応えるものを、と模索を積み重ねてきた結果でした。

- 2003 DPC 制度導入(包括評価制度、院内感染で入院日数が増えると病院負担も増える)
- 2003 SARS(重症急性呼吸器症候群)発生
- 2005 医療法改正(医療施設における院内感染防止の義務化)
- 2009 新型インフルエンザ H1N1 発生

- 2005 九州支社開設
- 2006 関西支社開設
- 2008 東中野東京本部移転



- 2009 東海支社開設

2010

- 2010 診療報酬改定
感染防止対策加算制度開始
- 2011 東日本大震災発生
- 2012 MERS(中東呼吸器症候群)発生
- 2014 エボラ出血熱(西アフリカ中心)発生

- 2010 川崎モレーンラボ & 倉庫移転
- 2010 ニトリル検査用手袋・グレイシア(マレーシア)製造販売開始
- 2010 モレーンキャラクター・モコちゃん誕生
- 2011 MDAT(モレーン災害支援チーム)発足、東日本大震災を機に被災地で感染対策をサポートするチームを組織化



「災害で打ちのめされた被災地の方々が、さらに感染で苦しむようなことを許してはならない」という使命感のもと震災発生3日後にはトラックを借りて被災地に製品を届けました。感染症が起こりやすい被災地への支援はその後も継続して力を入れています。

- 2011 N95 フィットテスター・TSI(米国)販売開始
- 2012 北海道支社開設
- 2012 感染対策ボードゲーム・SAVE!(国内開発)サービス開始
- 2012 環境衛生ワイブ・クリネル(英国)販売開始

- 2016 熊本震災発生
- 2017 九州北部豪雨災害発生
- 2018 西日本豪雨災害発生

- 2012 コンセプトブック「言いたくても言えなかった看護師さんの気持ちってどこに行くのかな」が日本 BtoB 広告賞の特別賞を受賞
- 2014 スクリーンシステム・サイレンティア(スウェーデン)販売開始
- 2015 ニトリル検査用手袋・ZERO(マレーシア)製造販売開始
- 2015 紫外線照射装置・UVDI(米国)販売開始
- 2016 熊本震災に MDAT 出動
- 2017 九州北部豪雨災害に MDAT 出動
- 2017 岡山オフィス開設
- 2018 西日本豪雨災害に MDAT 出動

- 2018 手指衛生評価システム・SCORE!(国内開発)販売開始
- 2018 N95 レスピレーター・Air+N95(シンガポール)販売開始
- 2018 ハイリスク用全身防護服・カプセルスーツ(国内開発)販売開始

- 2019 カプセルスーツが GOOD DESIGN 賞を受賞

- 2019 仙台オフィス開設



2020

- 2020 新型コロナウイルス感染症が拡大
- 2020 4-5月 緊急事態宣言
- 2021 1-3月 緊急事態宣言
- 2021 7月 東京オリンピック・パラリンピック 2020 開催
- 2021 4-9月 緊急事態宣言

- 2020 小型一体型 PAPR・HALO(オーストラリア)販売開始



- 2020 ダイヤモンドプリンセス号の感染対策支援(手指衛生、PPE)
- 2021 インスタント隔離ユニット・レディールーム(英国)販売開始
- 2021 学術部発足
- 2021 企業理念改訂
企業ロゴアップデート





New Logo

感染対策の進化を目指して さらに、力強く。

理念改訂に伴い、企業ロゴもアップデートすることに。モレーンコーポレーションの社名の由来は氷河がゆっくりと地を削り砂や岩が堆積してできる「モレーン湖」です。旧ロゴには「私たちがモレーン湖のようにコツコツと感染対策の実績と挑戦を積み重ねよう」という初心が込められていました。この想いを引き継ぎつつ、新ロゴではさらに力強いラインを用いることで、感染対策の進化に挑戦するモレーンの強い信念を表現します。また、私たちの実績と挑戦の象徴であるモレーン湖をセンターに堂々と配置。感染対策に真正面から取り組むモレーンの決意を表しています。この新しいロゴを旗印に、モレーンのネクストステージが始まります。



- ① 筆圧を感じる「入り」で強い信念を表現
- ② 感染対策ひとすじを表す一筆書き
- ③ 進化を目指した躍動を表す上昇する形状
- ④ これまでの実績と挑戦の象徴、モレーン湖
- ⑤ より力強い意志で高みを目指す、鋭角な山頂



モレーンは、 ネクストステージへ。

今日も感染症と戦う医療従事者の皆さまへ。
私たちは、皆さまのように現場で患者さんの命を救うことは
できません。それでも、気持ちはいつも現場に寄り添い
すこしでも皆さまの力になりたいと考えています。
そして今回のコロナをきっかけに、あらためて
感染症が人と人を遠ざけることのない未来を目指し
感染対策の進化のためにさらなる挑戦をしていきます。
新しいモレーンに、これまで以上にご期待ください。

—モレーンコーポレーション

